

漆器産地榎川村の積極的な活動は特殊で、長野県民の特質が働いているが、関わった人たちの多くが中国と何らかの関係を持ったことが明らかである。大衆的漆器を中心とするこの産地は戦前から漆器の輸出と中国産漆の使用で中国に対する認識が他の産地より高かった。村の主幹産業である漆器業に携わる人が多く、戦時中出征、満蒙開拓、商売などで中国に行き、生活した経験がある。それらの人たちは引き上げ後、漆器を作る傍ら日中友好交流にも熱心だった。そのような人によって作り上げた関係は産地の発展に欠かせないものであった。

榎川村と中国湖北省の関係は戦前直接的ではなかったが、当時の資料から見れば榎川村で使う漆には湖北省産出のものが多かったとうかがえる。両地域に関係が結ばれた理由は湖北省が大きな産地であるからのみでなく、長い間中国の漆の集散地として、漢口が重要な地位を占めていることにある。戦後、日中関係の非正常化、漆商社の一方的値上げに対する抗議の結果、榎川村と湖北省の間に直接的な貿易関係が結ばれた。これによって、二つの地域が再び緊密に関わるようになった。この時期、村長をはじめ村の指導者たちが頻繁に中国に訪れ、交易会、漆生産視察など多くの活動に取り組んでいた。一方、中国からも交流団体・個人が村に来て交流を行っていた。漆貿易を継続するには、人的往来、交流が大きな役割を果たしたとうかがえよう。

「見せ物の場所」から「生きられる空間」へ：  
中国・深圳のテーマパークをめぐる表象と実践

李 小妹

本研究では、中国の南部都市・深圳において、新しい都市空間が、社会的生産物としていかなる過程で作られているのかについて考察した。深圳は、1980年代以降、中

国の「改革開放」政策の下で、経済発展の「実験地」として作り上げられた新しい都市である。深圳はまた、香港に隣接するという地理的優越性のもとで、「経済特区」としてグローバル化の影響を受けてきた。こうして、中国の資本主義経済化とグローバル化がともに作り出した新しい都市として、深圳は、グローバル時代における中国都市の都市空間の変容と、都市空間を生きる人々とのかかわりのダイナミックな変容実態を、他のどの都市よりも先見的に、より良く反映している。

本稿は、深圳で文化観光施設として開発された「錦繡中華」、「中国民俗文化村」と「世界之窗」という中国最初の三つのテーマパークに焦点を当て、その建設経緯、展示内容と展示手法について検討したうえで、テーマパークを企画し建設した中国政府と資本家の側が、これらの空間を生産する際に、空間の利用者となる人々に、どのような経済政治的なメッセージを送ろうとしているのかを明確にした。本研究をなすにあたって、これらのテーマパークで2週間にわたってフィールドワークを行い、観光客やテーマパークで働く労働者など、テーマパークという空間に様々な形でかかわりを持つ人々に接近し、彼/彼女たちによる消費、利用、また生産といったあらゆる形をもったテーマパークとのかかわりのダイナミックな実態を観察した。そして、彼/彼女たちの活動によってテーマパークは、単なる「見せ物の場所」ではなく「生きられる空間」としても再生産されていることを確認した。

第1章では、本研究の問題関心と研究目的を明示したうえで、本研究に用いた三つの視点、すなわち、グローバル化、空間の生産及び空間のポリティックスについて述べ、また、先行研究の検討を通じて本稿の理論的枠組みについて紹介した。まず人間主義地理学を代表する中国系アメリカ人地理学者のトゥアンノ場所論、レルフの没場所性に関する理論を

紹介し、彼らの理論が都市空間の分析にどのような有効性と制約を持つかを検討した、そこから新しい空間論への展開の必要性を探りだして、ルフェーブルの「空間の生産」とソジャの「第三空間」をめぐる諸概念を考察した。本稿では、都市空間を捉える際に、ルフェーブルによる「空間は社会的生産物である」という空間の新しい定義を議論の出発点とした。また、本研究の理論的枠組みの一部として、香港中文大学の馬杰偉による『バー・工場 南中国都市文化研究』（『酒吧 工厂—南中国城市文化研究—』（2006）江苏人民出版社）という著作を新しい空間論が用いられた中国の都市研究の見本として紹介した。

第2章では、深圳の歴史とその都市空間構造について検討し、深圳はいかなる国内外の政治・経済・歴史的諸要因の下で作られたのか、また、深圳が都市化と経済発展およびグローバル化の影響下で、どう変容してきたかについて考察した。そして、深圳がテーマパーク化された都市であると規定し、テーマパークが深圳の都市空間を解明するための切り口となる根拠について説明した。

第3,4章は、本稿の中心となる部分であり、フィールドワークで得た資料を用いながら深圳の都市空間の解読・分析を行なった。フィールドワークの中心対象である深圳のテーマパークについて、その建設経緯や景観などを記述し、そこで出会った人々についての観察や聞き取り調査などから得られた資料を、空間論的視点で解釈した。すなわち、テーマパークはまず、文化観光施設として経済利潤を目的とした場所である以前に、中国のナショナル・アイデンティティを見せる、いわば政治性をもった「見せ物の場所」として作り上げられた。テーマパークはまた同時に、園内の労働者や観光客によって常に生産・再生産されていく「生きられる空間」でもある。

第5章の結論では、テーマパークにおいて考察した「見世物の場所」と「生きられる空

間」といった二つの空間のまなざしを深圳の都市空間に向けることによって、深圳の都市空間を再定義した。すなわち、深圳は現実に先端的な経済活動が展開される（現代的）都市空間であると同時に、現代性を象徴する記号的な空間である。深圳という都市そのものが、いわばひとつのテーマパークのような存在であり、そのテーマ（記号）というのが、「グローバル化」（の展開）であり、中国の改革開放経済の成功（「社会主義体制」と「市場資本主義的経済様式」との接合）である。深圳の都市社会空間は社会主義の中国政府による経済のグローバル化と国民国家の政治的アイデンティティへの追求の元での空間の実践の産物であると同時に、深圳の人々によって日々の生産と消費など諸活動のなかで生産・再生産されている「生きられる空間」でもある。